



Title	巻頭言：大阪大学での教育と研究を終えるにあたって
Author(s)	佐藤，眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2022, 26, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学での教育と研究を終えるにあたって

On Completing My Education and Research at Osaka University

佐 藤 眞 一

本誌「生老病死の行動科学」の私の巻頭言も今回で最後になりました。12年半前の2009年10月1日付で大阪大学大学院人間科学研究科の本研究室に赴任して以来、翌2010年3月発行の第14巻から今号の第26巻まで、途中、研究室創立20周年記念の合併号を含み12回にわたって巻頭言を書かせていただきました。毎年出遭った出来事や考えていることなどを短い文章ではありますが、心を込めて書き綴ってきたつもりです。

その間には、2011年の東日本大震災や今も続くコロナ禍など、世間を大きく揺るがす出来事もありましたし、個人的には闘病生活や、身内との辛い別れもありました。一方で、教え子たちの新たな世界への旅立ちを様々な形で経験し、喜びを共に体験させてもらいました。生死にかかわるような大怪我を乗り越えて、新たな世界に踏み出したある教え子のことは生涯忘れられないでしょう。また、新たな学会の設立に関与したり、他分野の先生方とのプロジェクト研究という得難い貴重な体験をしたりもしました。

楽しみもあり、悲しみもあり、苦労もあった12年半でしたが、新たな挑戦と思い、飛び込んだ大阪大学での生活は、私の人生の宝になりました。この場をお借りして、大阪大学の関係各位に心よりお礼を申し上げます。また、知己と言え、同僚の権藤教授以外にはほとんどの関西で奮闘を始めた私を支えて下さった学外の皆様には、感謝以外の言葉が見つかりません。研究の場を提供して下さい、研究以外のことに疎い私に社会に関わる事々に目を開かせてくださったのは皆様です。

こうした御恩に報いるために私にできることは何かと、しばらく前から考えていました。そして、前任の故藤田綾子先生に託された責務の一つである研究者を育てるということについて改めて思い巡らせました。そのような経緯の中で、私の在籍期間中に博士の学位取得に至った大学院生の研究から私が何を学び、何を考えてきたかを書籍としてまとめて、多くの方々からの評価を受けることを決断しました。2018年に最初の案が浮かび、翌年に出版社のミネルヴァ書房様に企画をお認めいただき、2022年2月に『心理老年学と臨床死生学～心理学の視点から考える老いと死～』と題して出版することができました。私が博士研究の指導をさせていただいた元院生の皆様の学位論文を下敷きにして、現在も発展中の研究成果をも含む論文を書き下ろしていただきました。また、私と共に彼らの指導に当たってくださった同僚の先生方、権藤恭之先生、平井啓先生、中原純先生からは各部の最初の章に心理老年学と臨床死生学の先駆的な論考と今後の発展を見通す文章を頂戴することができました。多くの皆様にご一読いただき、ご高評を賜うことができれば、私の大阪大学での最後の仕事としてそれに勝る望みはありません。

老いと死の不可思議さに、20歳にも満たない未成年の私が魅了され、研究者として生きてくることができたのは、今思えば僥倖としか言いようがありません。そこに導いてくださった3人の恩師のことをここに記させていただくことをお許しください。学部、大学院の指導教授として研究者の在り方を厳格に示してくださった故三島二郎先生、東京都老人総合研究所(現・東京都健康長寿医療センター研究所)に研究の機会を与えて下さった筑波大学名誉教授の故井

上勝也先生、そして、何一つ知識のない私を学部1年生の時から心理老年学の世界に導いてくださった元東海大学教授の谷口幸一先生には、お礼の言葉が見当たりません。

出逢いとは人生に他なりません。何かが少しでもずれていれば、こうした先生方や学生さんや法人・企業等の学外の皆様にお逢いすることも、それによって私が感じ、学ぶこともなかったでしょう。今現在もコロナ禍で、2年前には想像すらできなかったことが進行中です。災いであることは間違いありませんが、そうした逆境の中に居るからこそ生まれてくる新たな知恵のあることも、今の私にはわかるようになりました。

さて、本文の最後に書き残しておきたいことがもう一つあります。本誌「生老病死の行動科学」というタイトルについてです。この名称は、本研究室初代教授の柏木哲夫先生が1996年に発刊された「大阪大学臨床行動学年報」の第8号の後の2004年発行の第9号から、第2代教授の故藤田綾子先生が改められました。「生老病死」とは、言うまでもなく仏教でいう人生の四苦のことです。藤田先生が何故この言葉を本誌のタイトルにしたかを伺う機会は、残念ながらありませんでした。しかし、私なりに考えたことがあります。

「生老病死」の「生」は人生の始まり、「死」は人生の終わりです。その間に「老」と「病」の文字があります。私たちは誰しも、希望と充実と喜びに満ちた人生を望むものです。しかし、そのようなことだけで人生を終えることのできる人は必ずしも多くはありません。私がこれまでに逢ってきた方々は、そのような人生とはまた別の人生のあることを教えて下さいました。老いと病に苦しみ、耐え、それを超えたところに人生の悟りがあるということです。

若くして結核を患い、脊椎カリエスの激痛に苦しみ、絶命した俳人の正岡子規は、死の少し前に「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気に生きて居る事であつた」と日記に書きました(『病牀六尺』岩波文庫)。超高齢社会の現在、老いて生き、病に苦しむことは誰にも起きる可能性があります。もちろん、できればそのような悲しみや苦しみを味わわずに人生を全うできればそれに越したことはないのだろうとは思いますが、しかし、こうした悲しみや苦しみの中にあっても「平気に生きて居る」ことが人の本当の強さであり、ただ一回だけの己の人生を高みへと導いてくれるものなのかもしれません。

私の最終講義のタイトル『生と死と、命と』には生と死という「事実」の間にある老と病を「命」という事実だけでは語れない「心の内を表す言葉」として用いました。大阪大学での研究生生活の後半を一緒にした大阪大学社会ソリューションイニシアティブ(SSI)のプロジェクトメンバーと共に3回ほどのイベントのタイトルにこの言葉を使わせていただきましたが、「生老病死」の四苦を乗り越える知恵と方法のための新たな道を探るのが「心理老年学と臨床死生学」に課せられた研究テーマだと改めて考えるに至り、最終講義のタイトルとさせていただきますことにしました。

臨床死生学の研究と実践に半生を捧げてこられた初代教授の柏木哲夫先生と、第2代教授として高齢者の活力と可能性を研究テーマとしながらも自らは病に苦しまれた故藤田綾子先生の教えと研究室の伝統を踏まえ、次世代の権藤恭之先生に無事にバトンを渡すことができることを、今はしみじみと感謝しています。

「生老病死の行動科学」第26巻をお届けします。インターネット上での公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫(OUKA) <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

また、当研究室のホームページからご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学研究室 <http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/>